

学位論文の要旨	
氏名	張 曉娜
学位論文題目	中国語における日源新詞の受容について
<p>“御宅族”（オタク）“达人”（達人）“萌”（萌え）等のように、1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。外国語が外来語として輸入される際には、話者の社会的属性や語の性質等により、定着の度合いが異なり、輸入先の言語の文字表記や文法の制約にしたがって、何らかの変更が生じることがある。本論文は、日源新詞の借用における言語形式面と言語使用面の特徴、およびその広がりの実態を言語使用者の社会的特徴との関連で分析し、日源新詞の借用はどのような過程を経て中国語に入ってきたのか、語彙の受容過程にどのような特徴が見られるかなどの面から、日源新詞の国語化（中国語化）を探究したものである。</p> <p>これまでの日源新詞に関する研究は、語彙収集（張黎 2015, 侯仁鋒・袁薇 2016）、意味論や語用論などの研究（洪洁 2011, 芦茜 2011 など）や、文化、歴史的研究（顾江萍 2007）が多く、日源新詞の受容実態を捉える研究は少なかった。それに加えて、中国語においては「外来語」「新詞」などの概念の意味範囲が定まっていないこと（史有为 2013, 沈国威 1994）、「日源新詞」だけでなく「日本語由来の外来語」に特化した辞書は一つもないこと、くわえて語彙の収集は、日源新詞を判断する基準がしばしば研究者により異なること（谢静怡 2012, 彭広陸 2005）、などの問題があった。</p> <p>これらの問題をふまえて、本論文はまず日源新詞の定義を明確にし、分析対象の語彙を絞り込んだ。そののち、対象となる語彙に関して、言語形式の面においては、語構成、音訳・意識など受容の方策、意味変容の問題など語彙の言語的特徴を整理した。さらに、言語使用面から日源新詞の受容状況をアンケート回答者の社会的属性との関連でとらえ、受容されやすい/受容されにくい語の性質などを考察した。その結果を通して、日源新詞はどのような借用の過程を経て中国語に入ってきたのか、語彙の受容過程にどのような特徴があるのかなど、メディア論的知見も加えて論じた。</p> <p>「はじめに」では、本論の目的や研究方法について述べ、日源新詞に関する先行研究を</p>	

概観することにより、言語使用面から外来語の国語化を捉える本論の独自性を示した。

第1章は「中国語における外来語の概念について」である。本章では、まず中国語における「外来語」に関する概念と意味する範囲に焦点をあてて先行研究を精査した。その結果から「外来語」と「借詞」などの術語の使い分け、さらに「意識語」と「日本語由来の借形語」の位置づけを検討し、本論における「外来語」を「他の言語から取り入れられ、記号表現の面（音声面あるいは形態面）で借用が発生する語彙のことであり、具体的には、音訳語、逐訳語、そして借形語のことを指す」と定義した。

第2章は「日源新詞の収集と得られた語の概観」である。第1章で示した「外来語」の定義をもとに、「日源新詞」を「1978年の中国の改革開放政策以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語」と定義し、①語が外来語かどうか、②語が日本語由来かどうか、③語が新詞かどうか（1978年以後に輸入された語彙かどうか）という3つの判別基準を明確に立てた上で、新詞辞書、先行研究およびメディアから分析対象の語彙を絞り込んだ。次に、対象となる274語の日源新詞の品詞と意味分野を分類し、日源新詞の意味分布の特徴を考察した。この274語は1978年～2017年初出のものであるが、これらをそれぞれの初出年で10年ごとに分けて整理し、各期間で輸入された語彙の量およびその品詞分布と意味分布を社会的背景と重ね合わせて検討した。

その結果、274語の日源新詞は、物・事などの概念を表す名詞の数が圧倒的に多く、動詞、形容詞の語数はどちらも全体の1割程度に過ぎないことがわかった。意味分布をみると、「A 自然」分野に属するものが少ないこと、「B 人事」のうち、職業、年齢、性格や身振りなど人物を描写する語、「C 文化」では、衣食住などに関わる語が中心であることがわかった。また、輸入された年代を見ると、衣食住などに関わる語が主に1978年から1997年までの20年間に多く輸入されたのに対して、1998年から2017年までの20年間には人物を描写する語が大幅に増加していた。

第3章は「言語形式面から見た日源新詞の受容-形態レベルと意味レベルの受容を中心に-」で、音声、文字、意味から成る「言語形式」の面において日源新詞の「国語化（の程度）」を考察した。収集した274語それぞれについて、語彙の形態と意味の2つのレベルに見られる受容の特徴を分析した。その結果、形態レベルでは、①カナ（仮名）をローマ字に変換して取り入れるなどの新しい受容法が見られたこと、②借形語が優勢であること、③音訳語が増加したことがわかった。意味レベルにおいては、「暴走」を例に考察した結果、①日源新詞においては、意味する範囲の拡大/縮小、語のイメージの変化、および意味の転換等の変容が観察されること、②漢字が語彙の意味理解へ影響をもたらすこと

などがわかった。

また、大幅な増加が見られた音訳語には、「贅沢借用語」が多く、遊び感覚の集団語的使用という特徴が見られた。その増加は、語義の分布や日本語自体の変化などによる言語面の要因、および語彙を輸入するルートの多様化、語彙の借用目的の変化など言語外の要因が関わっていることがわかった。

第4章は「言語使用面から見た日源新詞の受容—定着度調査を中心として—」で、「言語使用」の面から、日源新詞の中国語化の程度をみた。具体的には、対象となる274の日源新詞から45の調査語を抽出して行った質問紙調査の結果から、語彙の定着度と地域、年齢などの日源新詞使用者の社会的属性との関連をとらえ、日源新詞の受容状況を考察した。

分析の結果、45の調査語は全体としてある程度認知されているが、知名度の低い語がまだ数多く存在し、これから定着に至るかどうかは不明という段階にあることがわかった。また、回答者の社会的属性との関連を分析した結果、地域、年齢が日源新詞の受容に影響することがわかった。つまり、居住する都市の規模が大きく、若い人の方がより日源新詞を受容していると解釈できる。調査回答者のうちに、シャンハイの10代～30代の回答者グループが、今回の定着度調査では日源新詞を最も受容しているグループであることがわかった。また、各語の定着度を回答者の属性との関連で分析した結果、その定着は回答者の各属性によりばらつきが見られた。

第5章は「日源新詞の受容過程とその受容に与えるインターネットの影響—打 call (コール) を例として—」である。本章は、“打 call”の受容過程を明らかにすることにより、ネット経由で輸入されてきた日源新詞の受け入れと広がり、そして音訳語や贅沢借用語の大量増加など、日源新詞に見られる形式面や意味面での変化が新しいメディアとどう関わることについて、メディア論的知見を加えながら論じた。

“打 call”の受容過程は、①この新詞はまず都市部の若者の間で、J-POP およびサブカル用語として使われ始め、②続いて意味の派生が生じ、その派生的意味がネット TV 番組や新浪微博 (シンランウェイボー) などの SNS での大量使用によって一般のネットユーザーに広がり、③最後にネットメディアからマス・メディアへ拡散して、各地域と各年齢層まで広がったと考えられる。インターネットが普及した後のデジタル時代における外来語の受け入れとその広がり、概ねここで示すような普及と伝播のモデルで捉えることができると考えられる。

次に、日源新詞には音訳語、贅沢借用語の大量増加、日源新詞の発生、使用、および形

式面、意味面などの言語変化がインターネットとどう関わるのか、メディア論的知見を加えながら論じた。日源新詞の受容に見られた言語形式面での変化は、2つの次元においてインターネットを代表とする電子メディアの浸透と大きく関わりと言える。「技術論的な次元」においては、インターネットの普及がネットユーザーたちの発信者としての可能性を高めたことで、新しい受容法が生まれるなど、多様な言語表現が可能になった。また「意味論的な次元」においては、電子メディア時代になって、文字に視覚と聴覚などの身体感覚が求められるようになり、それが音訳語、贅沢借用語の増加に繋がった。また、アナログ時代からデジタル時代への移行で、身体を通してより直接的に感じる方向へとシフトするため、これからの外来語の受容には、音訳語、贅沢借用語の比率がさらに増加すると予測される。

最後に「おわりに」では、本研究の意義とこれからの課題について述べた。

参考文献

- 顾江萍（2007）「汉语中日语借词研究」[D]厦门大学
- 洪洁（2011）「浅谈汉语中的日源新词—以“媒体”为例」『日源新词研究』学苑出版社
- 芦茜（2011）「日源新词“封杀”的考察」『日源新词研究』学苑出版社
- 侯仁鋒・袁薇（2016）「日本語からの新借用語についての整理と思考—1978年～2014年—」『日中語彙研究』愛知大学中日大辞典編纂所 第6号 pp. 27-44
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 史有为（2013）『汉语外来词(增订本)』商务印书馆
- 谢静怡（2012）「日源外来词新词语特征」[M] 燕山大学
- 彭広陸（2005）「中国語と外来語」『国文学 解釈と鑑賞』第70巻1号 至文堂
- 張黎（2015）「中国の新語に於ける日本からの借用語について—メディアの使用状況を中心に—」言語文化論叢(9)